



Title	信念の非合理性の根拠 : スペルベルの理論に寄せて
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1985, 11, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10223
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

信念の非合理性の根拠

—スペルベルの理論に寄せて—

菅野盾樹

信念の非合理性の根拠

— スペルベルの理論に寄せて —

1 一見して非合理的な信念の「理由」

古くから、世界のいろいろな地域で、通常の人にはない力を使って仲間に災厄をひきおこす邪悪な人間の存在が信じられてきた。このような信仰はいまだに命脈を保っている。人類学者はそれを「妖術」witchcraft とよび、またこの恐ろしい力をあやつるとされる者を「妖術師」とよんでいる。もちろん、こんな信仰は非合理だし、妖術師などいるはずもないと、われわれは言下に断定するはずだ。

なるほど、この断言にはそれなりのききめがある。一般に、非合理的な信念のはびこりを封じ、その信憑性を削ぎとるには、信念の主を説得してその蒙を啓いてやろうとするかわりに、断乎たる「否」を終始その信念へ打ちつけてやるほうが、目的を達成しうる場合がある。というのも、だいたい合理的な説得にやすやすと屈服しない点こそ、まさしくその信念が非合理であるいわれであるからだ。どんな反証も平気で受入れて無傷ですましようしたたかさが、そうした信念にはある。二つの例を見てみよう。

ブラジルのボロロ族は「われわれは金剛インコだ」と語っている。ヒトという動物種が同時に別の動物種であると言うのであるから、ここに表明されている信念のなんと非合理的なことか。しかし彼らに反論するつもりで、でもあなた方には羽がないではないか、といっても無駄だろう。そんなことは、彼らも百も承知だからだ。この事例は、極地で行方不明となり凍死が確定視された探検家にかんして、われわれが「彼はあたたかい人だ」と語りうる場合と似ている。「あたたかな」人物が事実「冷たく」なっているにもかかわらずかまわないのである。すなわちボロロ族の信念は字義的ではなく、象徴的であるにすぎない。

「救い主は死して後甦えった」という、キリスト教の信仰の簡条はどうだろうか。この命題は、明らかに分析的に真ではない。なぜなら、この否定形を言っても言葉づかいにおいて矛盾をきたすわけではないからである。しかしまたそれは総合命題でもない。換言すれば、この信仰簡条は、「救い主は十字架上で死んだ」がその真偽を言語外の領域、つまり歴史の事実を負うのとはちがって、そうした事実固有の真理性を仰いではないのである。この点は神学者ないし聖職者自身の言明するところであって、この命題の正しい意味はたんなる死すべき者の理解を絶しているという。こうして、信仰の命題の意味論的身分はといえば、

それはある種の擬似綜合命題にはかならない¹⁾。

ところで、この種の信念にむかって「非合理だ」(「迷信だ」、「誤りだ」、「時代錯誤だ」、「神話だ」、「ばかげた話だ」など)ときめつける方策は、もちろん万能ではない。論証や説得にまさってこうした断罪が有効なためには条件がある。それは、断罪をおこなう者が信念の持主に対してなんらかの意味で權威を持つということだ。上級生にお化けの話をかきされて、夜中の物音におびえるようになった少年は、大入道や三つ目小僧が科学的に言って存在するはずがないという論証には耳をかきないだろう。それよりむしろ彼は、なんでも知っていて嘘をついたことのない、信頼しうる父親の、お化けなど存在しない、という確言に安堵するにちがいない。

權威を欠く者によって言い放たれる断罪は、必ずしも実効をあげないばかりか、ミイラとりがミイラになることさえしばしばである。というのも、この種の非合理性の言明には当の信念が非合理だという信念が当然伴うけれども、それにはまた別の信念、<非合理的信念は合理的信念によって破砕されるはずだ>という仮定がやもすと伴うことがあるからだ。この仮定は正しくない。党が興隆をみた時期に指導者の一人はこう語っている。天皇制に対してこれまで共産主義者はあやまった態度をとっていた。それは古事記や日本書紀の記事をたんに迷信だときめつければ十分だと考えたことである。ところが治安維持法で獄につながれる身になって再考してみても、彼はこう結論する。「もし唯物史観が真理なら、天皇制という迷信が古代から今にいたるまで続くはずはない。非合理性は合理性によってすみやかに打倒されるものだからだ。しかしそれは続いている。故に、唯物史観は少なくとも日本にかんしては誤っている」と。このようにして共産主義者は「信仰告白」めいた手記をすすんで書いて転向していったのである²⁾。

非合理的信念に対して、それをはっきりと非合理だと宣言することが誤りだとは思わないし(相對論者に反して)、また後述のようにそうしなくてはならないのであるが、しかしわれわれにいぶかしい思いがわだかまっているのも事実である。なぜわれわれと同じ知性を持つ人間が、このようにばかげたことを信じるのだろうか。たとえば、キツネやイヌガミなどを使って人に仇をなすという憑きもの持ちの信仰を奉じる人物が、知能が低いとか精神異常だとか、そのようなことはまったくない。現在なお妖術信仰のさかんなアフリカの諸民族は、西欧近代の所産である科学・技術を持っていないか、あるいは少ししか移入していない。けれども、その地の人びとが固有な技術を発達せしめていること、ばかりか、近代科学とは趣きの異なる知識体系を開発していること、こうしためざましい事実は人類学者の研究によつてますます明らかにされつつある。要するに、彼らも欠けるところのない知性の持主なのである。ヨーロッパに目を転じると、なおさら「なぜ」の間を禁じえない。というより、西欧人みずからがこの間の切実さを痛感していることをわれわれはみいだす。たとえば人類学者

リーンハートはこう述べている。妖術は現代西欧では迷信だときめつけられている。しかし昔のヨーロッパでは、立派な知性の持主が「妖術を事実として受け入れている」。したがって、この信仰と知性とは両立するのだ、と⁸⁾。リーンハートがこの両立をどのように説明したかはさておき、少なくとも両立という事実が彼にとって差迫った問題であることは明らかである。

この「なぜ」の問にどのように分析のメスを揮うか。合理性という主題にとって、これは最重要な論点の一つにはかならない。以下で、この問に対しすでに提出されたある試案の検討とそれに伴ういくつかの未解決な事項を調べることにする。しかしそれに着手する前に、この問からあらゆる方向にどこまでも逸れてゆく錯誤の形態を見届けておくことにしたい。

2 主知主義的逸脱

なぜ知性ある人間がそのような非合理的なことを信じるのだろうか。逸脱の一步はたとえば次のような仕方である。非合理的な信念の持主の知性になんらかのハンディを課すこと。フレイザーやレヴィ＝ブリュル⁹⁾の選んだ道がこれにはかならなかった。なるほど、ド・ランクルはすぐれた法学者であって、ボルドーの高等法院判事の重責を負っていた経歴からみて、知性を欠いていたとはとても言えない。にもかかわらず、彼がそうした信仰に身をゆだね、獄に収容しきれぬほど多数の魔女を告発したのは、妖術を構成する原理を彼もまた知性のうちに担っていたからにちがいない。ド・ランクルが可視的だと信じた魔女の宴、皮を剥いだ猫やヒキガエル、トカゲなどから調剤した、彼が有効だと信じた毒薬など、こうしたいっさいの非合理的な表象¹⁰⁾は、知性そのものよりむしろ知性の働きを制御するある種の心理法則の特異さに帰せられるべきだ——たとえば、その道はこのように進む。

フレイザーが類感呪術と感染呪術という区別をおこなったことはよく知られている。前者は互いに類似するものは同一である、という誤った原理に、後者は、かつて接触していたものはつねにそうでありつづけるという、これもまた誤った原理に基づいて実施されるのだという。たとえば、スマトラのバタク族では、母になりたいと願う不妊の女は、木製の赤ん坊を作り、それを膝のあいだにはさむ。模倣によって実際に子がさずかることを固く信じながら。ここでは類似（人形と赤ん坊との、また人形を膝ではさむことと分娩との）がただちに同一にすりかえられ、模倣が事実¹¹⁾に匹敵させられている。また、チェロキー・インディアンのあいだでは、女兒の臍の緒を、その子が長じたときパン焼き上手となるようにと、臼の下に埋めるならわしがある。もともと子供の軀の一部であったものは、子供から離れたのちも子供同然であるから、臼の近くでパン作りの見聞を積むことができるのである¹²⁾。

フレイザーの呪術理論によれば、未開人は「誤った観念連合」（われわれだったら「誤っ

た推論規則」と言うだろう)をおこなうのであって、このかぎりそうした連合を妥当とみなさぬわれわれにくらべ「非合理」であるが、観念連合の規則が原理的に遵守されており、そのつど気まぐれに任意のやり方がなされるわけではないこと、その結果、さまざまな呪術が二つの型にまさに従うこと、こうしたかぎりでは、未開人の信念ならびにその表現である呪術というプラクシスは秩序を保有しているのだ。言いかえれば、それぞれはすじが通っており、「合理的」なのである。しかも彼らは儀礼的文脈の外部にひろがる日常性の活動にさいしては十分に現実主義者でもあるのだから、ある意味で彼らの方が文明人より豊かな知性を有しているとも言える。しかし呪術が実効をもたぬことは明らかだ。このようにして呪術の失敗を経験しながら、その過剰な知性は陶冶され、文明人のそのような科学的なものへと進化することが予想される。この進化を経たのが、フレイザーを含めた西欧人であるというわけだ。

まとめてみると、未開人の信念は「不十分なデータから間違った推論、欠陥のある推理によって得られた帰結」⁶⁾にはかならない。また彼らは「信念をもつとき合理的であろうと努めてはいるが、しかし体系的であることを仕損じる」⁷⁾と言ってもよいだろう。

呪術がまったき合理性を目指しながらそれにしくじること、それがたんなる情動の表出などではないこと、このことを明言する点でフレイザーの見地は主知主義的である。しばしば悪口を言うためにだけひきあいだされるレヴィ=ブリュルの「前論理的心性」という考え方も、主知主義的であることでは変わらない。ただしレヴィ=ブリュルは、信念体系の合理性を論理的に統括するはずの矛盾律が適用されない知性の動きを、未開人のもとに見いだしたと信じた。ボロロ族は「自分たちは金剛インコだ」と断言する。彼らはなにも、自分たちが金剛インコのようなものであるとか、死んだら金剛インコになるとか、なにかこうした遠まわしのことを語っているわけではない。彼らが言いたいのは、自分たちが人間でありながらそのまま鳥であるという、本質上の同一性である。この信念はボロロ族の知性が矛盾律には従わぬこと、代りに異がただちに同であることを積極的に認可する「融即律」にこそ従うこと、このことを明らかに示している。未開人の知性は、それゆえ、われわれの知性の基準ではかれら「非合理」であるが、実は合理性の内容がまったく別の論理により規定されているのであって、正しくは「反論理」でもなければ「無論理」でもない。一口に言うなら、「かれは体系的であるのだが、しかし合理的であろうと努めはしない」⁸⁾のである。もちろんこの「合理的」とは、われわれの基準を押しあてた場合のそれである。

3 信念の事実化

主知主義者はいずれも「なぜ知性の持主が非合理的な呪術など信じるのか」の間から出発し

て、ある場合は知性の装置の一部を改修し（フレイザー）、別の場合は装置のほとんど全部を別のものに代替する（レヴィ＝ブリュル）ことで答を見出したつもりになっている。なるほど、このやり方によって信念の非合理性はいくぶんか割引かれたかもしれない。しかしその代償に、知性が都合のよいように改竄されたのである。信念の合理性を救うために知性の合理性が犠牲に供されたと言わなければならないし、西欧近代の合理性を守るために、「未開社会」へ非合理主義が押しつけられたのだとも言わなければならない。

しかしながら、この道はすぐに隘路にいたるだろう。文明化されたはずのわれわれの文化や西欧の文化にも依然として非合理的な信念は絶えることがないし、そればかりかつねに新たな装いのもとに再生産されている⁹⁾。これと対称的に、未開社会にも、われわれの基準からして合理的な行動や信念がいくらでも認められることはあらためて言うまでもない。合理性の定義がまだ明示されていない以上、そうした確言は根拠のないご託宣にすぎないと反論されるだろうか。その定義を調べる機会には別に設けるつもりである。ここではとりあえず、合理性とはわれわれがごく身近に「知っている」推論をすすんで受入れる態度（これは必ずしも自覚されているとはかぎらない）の様態である、と言っておこう。たとえばボロロ族は、上流から木が小舟にむかって下ってくる場合、それをよけなければ危険なことを知っている。この「知る」ことの意味は、そのような機会に遭遇するならば、かれらはためらうことなく小舟を操って流木を咄嗟に避けるということのうちにある。なぜかれらはそのような行為をするのか、それというのも、危険を回避するために。行為のうちに呈示された、この種の〈理由〉の使用に、すでに合理性が歴然とあらわれている¹⁰⁾。

フレイザーの呪術の原理、そして融即律となればなおさら、いずれも妥当な推論規則やいわゆる思惟の原理の、たんに消極的な表現でしかない。この点は留意されるべきだ。類似は同一ではない、という公準を否定して得られるのが類感の原理であるし、接触していたものも切離されればもう別物である、という点を否定すれば感染の原理が得られるだろう。したがって、二つの原理は原理と呼ばれるものの実は誤謬の別名にすぎない。融即律となると事情はいつそう明白である。それはただ矛盾律の適用がない、という欠如を指すだけの語句なのである。それなのに、そうした誤謬や欠如が知性の装置へと実在化されてしまう。なるほどこの手だてによって、非合理的な信念はその非合理性の外観を割引かれることになるかもしれない。しかし、消極的なものの実在化によって、実は、信念が事実にされたのである。つまり未開人は、丸太を削るのに手斧をどのように使用すれば有効であるかを「信じている」と同じ意味で、いわば真面目に、呪術が目的実現のために有効であることを「信じている」というのである¹¹⁾。

このような信念の事実化は誤りである。そうする以前の地点に戻って再考すべきだろう。あの「なぜ」の間から逸脱への道は*いわば必然性*をもっている。逸脱を差し止める唯一の鍵

はその間そのものなかに隠されているのだ。真の問題は、「非合理的信念」の意味論にこそある。換言すれば、「なぜ知性ある人間が非合理的信念を抱くのか」と問うとき、まずもってなすべきことは、この問への答をどこかへ探しにでかけるのではなく、この間において「信じる」ということがいかなる意味で言われているのか、「信じる」の意味はなにか、この点の掘下げにはかならない。行為を信念によって説明するのはよしとしても、問題はこの信念の素姓である。ここを看過してフレイザー理論を「大胆で素晴らしい」などと称揚するのは、いささか見当外れだろう¹⁹⁾。

4 スペルベルの理論

妖術信仰に代表される「一見して非合理的信念」の問題を、逸脱と紛糾の根をたち切るかたちで鮮やかに解いてみせたのはスペルベルである¹⁹⁾。いや、彼の処方問題は問題の解決というより、問題の成立機制を暴露することを通じての、その解消に狙いを定めている。一般的に言って、この問題への対処には三つの可能性がある。まず、そうした信念はたしかに非合理に映るということを経得事項として認める立場がありうるだろう。この場合、さらに二つの戦略が考えられる。その一は、当面する信念の非合理性を知性にハンディを負わせることにより割引くやり方で、これについては上にやや詳しく見た。その二は、そうした信念が実は合理的であることを、信念の社会的文脈、文化の相対性、信念の象徴性などといった補助概念の使用によって論証する立場である。ところが対処の可能性は以上に尽されない。問題の信念が困難を惹きおこす非合理性の外見を持つこと、これを否定して一挙に問題の根を截つこともできる。スペルベルが選択したのはまさにこの戦略だったのである。

実に単純なことなのだ。信念には事象的信念と表象的信念の二つがあり、そしてこの二つしかない。また、信念がかかわる概念表象には、命題表象と半命題表象の二つがあり、そしてこの二つしかない。したがって信念には、その性状と内容とに応じて、都合四種を数えることができる。問題は四種類の信念がその合理性基準を異にしていることである（とはいえ、半命題内容を伴う事象的信念には基準が事実上欠けているので、精確には「三種類の信念」と言うべきだろう）。「一見して非合理的信念」は、実は表象的信念であるのにそれを事象的信念と取違え、適合しない合理性基準をあてはめることによって捏造されるのだ。もしそれを正しく表象的信念として扱い、適格な基準をおしあてれば、問題の信念がそれなりの合理性をそなえることが目撃されよう。そうとわかれば、この上知性を改修したり相対論的断絶をうがったり、そうした一切の無理算段は無用になるのである。

この見解に必要な注釈を施しておこう。**事象的信念**とは当該主体の記憶に直接貯えられたすべての表象、ならびに彼がそこから推論によって導出するすべての追加の表象である。

事実的信念は、それを抱く主体からすると彼の知識と区別できない。それが事実に適中しているかどうか、信念として自覚されているかどうかなどは、このさい無関係である。重ねて言う、事実的信念はその規定性を、表象が記憶のうちに貯えられる様態のみに負うのである。

次に表象的信念とは記憶に間接的に貯えられたあらゆる表象にはかならない。たとえば〈愛がなければ幸せはない〉は私の精神の裡になんらかのかたちで表象されている。しかしよく調べてみると、それは直接にではなくて、たとえば〈愛がなければ幸せはないと一般に言われている〉といった、元の表象を部分として含むより大きな表象に嵌め込まれているのがわかる。愛がなければ幸せはないことは、私が自発的に口にするようなことではないが、それでもある状況やムードにおいて誠実に賛意を示すこともありうる見解なのだ。したがってごく普通の意味では、私はそうした見解を「信じて」いると言ってよいが、しかし無媒介的に（事実として）信じているわけではない。それにかんする（meta）事実的信念（〈愛がなければ幸せはないと一般に言われている〉）を抱く結果として、間接的にそれを信じているのだ。すなわち「表象的に」そう信じているのである。表象的信念のもっと正確な定式は、スペルベルによればこのようになる。表象Rは、主体がRであると誠実に述べるような、なにかRにかんする信念（事実的か表象的かは問わない）を抱く場合、この場合にかぎって彼の**表象的信念**である。

定式中の**誠実**という但し書きに注意しよう。表象的信念は別の信念の構成成分であり、この別の信念もそれ自身事実的であるか、あるいはどのみち別の事実的信念の構成成分でしかありえないから、その表象的信念が事実に信じられていないにもかかわらず、人がそれを表明するさいには、つねに、あたかもそれ自体が事実的であるかのように、いわば真面目にそうされるほかないのである。たとえばイエスの魅りを信じる敬虔なキリスト教信者を考えてみよう。彼は頭では、十字架に死んだイエスが三日目に神の手によって復活し人びとの目前に顕われたという聖書の記事をどうしても事実とは信じられない。というのも、歴史上死人が復活したただ一つの例も彼は知らないから。イエスの復活を歴史的出来事として説明することは不可能である。換言すれば、彼にはイエスの事跡にかんする表象を事実的信念として誠実に抱きかつ表明することはできないのだ。代りにそれは「信仰的靈的事実」¹⁴⁾として信じられているにすぎない。聖書の記者たちがそのように伝えており、聖書はまさしく神のメッセージである。この信念を介して復活ははじめて「事実」として信じられるのである。こうして彼は**誠実に**イエスの復活を確言するだろう。

先述のように、事実的信念においては、意識されているのは事実にすぎない。ところが表象的信念では、主体にはある表象を受容しているという意識が伴う。この差は後に問題になるだろう。

バートランド・ラッセルが「信じる」believe をはじめとする動詞（「知る」、「考える」、「推測する」、「望む」など）を一括して「命題にかかわる態度」をあらわすものと述べて以来、この種の動詞が言いあらわす態度（信念、知識、思考など）のかかわる当のものが命題である点は、当然のこととされてきた。命題とはなにか。これはまったく厄介な問題である。ここではしばらく、それは文ないし発言の意味ともなり思考内容ともなる、それ自体で真や偽でありうるもの、そして互いに論理的な諸関係に立ちうるもの、という伝統的命題観に従っておく¹⁵⁾。しかし「命題にかかわる態度」がこうした意味での命題にだけかかわるというのは、事実にもそぐわない。命題に似て文を自分の乗り物としながら、しかし命題の持つ性状を持ちあわせないなんらかの概念表象が存在する。私は、たとえば、科学雑誌の記事に次のことを読んで、そう信じている（権威ある雑誌が誤報をするなどということは、考えられもしないのだから）。

数年のうちに統一場の理論が完成されるだろう。

しかし理論物理学の専門家ではない私には、もとより「統一場の理論」の精確な内容は把握しがたい。では私は何を信じているのか。私にとりこの文は分析の完遂を許さず、したがってそのただ一つの解釈を同定できない以上、それは命題ではありえない。そうは言っても私はこの記事の各種の含意を信じてもいる。しかし結局私には言い替えられない、それゆえその含意を計算しえぬ一つの用語が残ってしまう。「統一場の理論」である。こうしてみると、私の信じているのは、数多くの概念を問題の用語に結びつけている何らかの表象だと言わなければならない。

要約しよう。命題表象とはただ一つの命題を同一指定しうるような文に対応する概念表象のことである。そのような同定にしくじる文に対応する表象は半命題表象とよばれる。上の例では、精確な意味を確定しえない語を含むから、その文によっては命題を同定しえないのであるが、命題の同定に失敗する仕方にはもう一つの場合がある。スペルベルはこの種の例として相対論者のスローガンをあげている。すなわち、

異なる文化に属する個人は互いに異なる世界に住んでいる。

この文はわれわれの常識で判断して、どことってわからぬ語を含んではいない。にもかかわらず全体としてどうにも解釈が一つに決らないのだ。こうしてこのスローガンは半命題表象を担うことになる。より重大な理論的意味を持つのはこの種の表象にはかならない。

注釈の最後として、合理性の基準に手短かにふれなくてはならない。事実に信念にかんし

ては、それが命題表象を伴うなら、その合理性の基準はほどのよい整合性であろう。ある信念を抱くことは、それがこの主体の持つ他の同種の信念と両立し、それらによって「正当化される」ことが必要である。ただし事実に信念全部の整合性確立は心理学的に言って現実的制約とはなりえない。実際の基準はずっと穏当である。すなわち問題の信念に有意性を付与する文脈を形づくりその確証や反証をおこなえる全ての信念との整合性で十分である。半命題表象を伴う事実に信念にかんしては、ここではもう整合性という尺度はあてはめようもないのだから、この種の信念こそ永久に非合理の域にとどまる。しかしスペルベルに言わせるなら、あらゆる文化はこの種の信念（それらは一丸となっている）を巧みに回避していて、誰かの信念として実現される例はまず皆無だと断定してよいのである¹⁹⁾。

表象的信念の合理性基準は次の形をとる。この種の信念は、これを包括する事実に信念が合理的である場合にかぎり、それ自身も合理的である、と。合理性は事実に信念から表象的信念へいわば遺伝するのである。私が前掲の科学雑誌の記事を表象的に信じる態度は合理的である。というのもこの雑誌は斯界では権威あることでその名をならしているからだ。雑誌の権威を疑う合理的な理由がないかぎり（たとえば、投稿する研究者の評判がしばしばかんばしくないとか、従来から記事に誤報が多いとか、そのような事実がないかぎり）、私が記事を信じるのは理に適ったことではないだろうか。このように、この基準は権威として感得される。信念に伴う内容が命題的である場合とちがひ、半命題的である場合では、同じ権威でもいささかその成立を異にしている。後者の方がいわば基準の力が弱少なのである。よく言われるように真理は多数決によっては保証されない。たとえ一万人がこぞって甲を主張し、たった一人が乙を唱えているにすぎないとしても、この情勢は乙という主張が誤っている証拠にはなりえない。反対に、彼一人正しいことが十分にありうるのだ。しかしこれは事実に真理にかんしてのみ妥当する境位にすぎない。半命題的内容の表象的信念にかんしては、合理性の多数決原理が貫徹する。成員の大多数がそうした表象を抱く場合、もう一人の成員が同じ表象を合理的に抱く根拠はすでに十分整えられている。いわば赤信号も皆で渡れば青信号にひとしいのである。

5 信念の非合理性の根拠

今一度、「一見して非合理的な信念」が捏造される手のうちを確認しておきたい。たとえば〈誰某はキツネを使って人に仇をなした〉という信念は一見するところ非合理だが、もしこの信念が表象的本性のものであり、その内容が半命題的にすぎない点が明らかにされるなら、そうした外見はただちに払拭されるだろう。実際、伝聞やうわさ、伝承などのネットワークをはずれた場所で成立する関与的事実などはなにもない。なるほどキツネを見掛けた者は事

実いるかもしれない。しかしその動物は正真正銘のキツネ（動物分類学上のそれ）だったのか。たとえそれがキツネであったとしても、それは精確には何をしたのか。たんに人家近くをうろついただけなのではないか、それ以上の仕業をなしたのか…。「事実」は、それを確定しようとするたびネットワークの迷宮に隠れてしまう。こうした事情は、この信念が表象的であることを紛れもなく示している。また、信念の内容が永久にその解釈的結末を迎えない以上、抱かれているのは命題ではない。そこで基準を事実に用いるものから然るべきものへ取替えよう。相当程度多数の人びとがそのような内容を互いに語ったり囁いたり、あるいは目配せや唇に指をあてながら口ごもったりして暗示しあうだけで、すでに、当該信念が合理的であるためには十分すぎるのだ。

ところでスペルベルの用意した枠組みは、この種の信念がある意味で非合理であるときっぱり断定できるという、特筆すべき長所をそなえている。この種の信念にはその固有の合理性基準があり、それを適用するなら非合理性の外見は雲散霧消する。これは、しかし、問題の信念が「ごく弱い合理性基準しか持ちえない」という意味で「非合理である」ことを言っているのだ。別の観点からこの「非合理性」を規定することもできる。すなわち、その信念はたんに半命題表象しか伴わないという意味で「非合理である」。憑きもの信仰は非合理である。なぜならそこに組込まれた合理性基準が表象の多数決原理にすぎないからだ。占いの託宣を信じるのは非合理である。なぜなら意味ありげなそのことばはついに半命題表象しかもたらさないからだ。

こうした判定能力は、フレイザー流の主知主義にはもちろんその現代的改訂版にはそなわっていない。古典的であれ現代的であれ、総じて主知主義は非合理的信念（ここでいうのは半命題表象を伴う信念のことである）の非合理的な所以を、近代西歐的（端的に言うなら、科学的）合理性基準の、信念への適用に想定している。適用により口を開いた断絶を埋合せるために、あるいは知性にハンディが負わされたり、あるいはそうした基準の適用に必要な「社会的文脈」をあらかじめ設定することを要請したり¹⁷⁾、なんらかの細工がほどこされる。しかしこの埋めたて工事は幻想のなかで営まれているのにすぎない。なぜなら、適用すべき基準が質物だからだ。しかも悪いことには、工事はとんでもない偽概念をでっちあげる。一見して非合理的信念の非合理性（半命題表象という様態に起因するかぎりでの）が糊塗されてしまうのである。そうした信念は西歐の基準に照らしてそれなりに合理的であるか、文脈を介しての変換によって十分合理的である（この場合も西歐の科学的基準によって秤量されている）か、このいずれかである。この見地に伴う倫理的疇範は寛容である。あるいはすでに西歐合理性を享有する者の余裕である。非合理的信念を持つ連中にも合理性を割愛してやろうというわけだ。本当を言って、このような寛容など余計なお世話にすぎない。そうした信念はある意味では十分合理的であるのはわかりきったことであるし、また別の意味では、

それは非合理きわまりない信念であるのだから。

これに輪をかけた幻想を相対論者はふりまいている。あらかじめ断わらねばならないのは、相対論というイデオロギー自体が半命題的水準を永久に越えることがないという事実である。したがって、相対論が合理的な検討に耐える「学説」であるかのように思ったらまちがえるだろう。もちろんどんな立派な、すでにその真理を権威づけられた学説であれ、どこか多少なりとも半命題性の混入を許していないような例はない。この点で相対論と他の学説とは五十歩百歩だとも言える。しかし決定的差がある。それは相対論は半命題性を己れの徳としているのに対し、他の説（わけても普遍論）はそのような性状をできるだけ軽減し無害なものにとどめようと企図している点である。したがってここで言及するのが、相対論的臆説といったものになるのはやむをえない¹⁸⁾。

相対論によれば、通文化的な合理性基準は存在しない。各文化の成員はそれぞれの流儀で合理性を測定しているという。この流儀は相対論のタイプによって「言語」、「社会的文脈」、「生活形式」などの名で呼ばれることがある。お茶やお花といった芸道の作法との類比が役立つだろう。裏千家の作法に順っておこなわれた点前と遠州流の点前とを比べて、どちらが正しいかと問うのはばかげている。どちらもそれぞれの作法に適っているかぎり正しいのであって、そもそもこうした比較が意味をなさないのである。もちろん他の観点から二つを比べることは自由だ。たとえばどちらがより優美であるかとか、どちらがより時間を要するかとか。相対論者に言わせるなら、信念の合理性にかんしてもこれと同じである。ある文化で一つの信念を合理化する規則はその文化固有のものであって異文化への流用は許されない。一見して非合理的な信念は、こうして、その非合理性の外観を不適切な基準の適用に負うのである。ひとたびこの無意味なやり方をやめるなら、信念は本来の合理性のうちで蘇生するだろう。

こうした議論を完膚無きまで批判し超出するにはかなり長大な論証が必要である。ここではただ一つ論点を呈示するにとどめ、本節の主題に立帰らねばならない。簡単に言うと、相対論が用いるこの類比は誤りである。芸道の作法は年月をかけ練上げられたものだ。それは所作の型を指図する一定の規則であり、初心者は稽古を積んでそれに習熟しなくてはならない。こうした規則の存在様態を「伝統的」と呼ぼう。それへ身をゆだねることによって伝統は彼に型をめぐむ。伝統に違反する者はほとんど全員が型の外部へ放逐されて終る（例外はその道の革新者だ）。伝統はそこに参加する各人がたんにそれを知るだけでは維持されない。その上に、各人が伝統を知ることが反射的に各人によって知られているのではなくてはならない。師匠が規則Rを知り、弟子がRを知っただけでは伝統にはならないのであって、師は弟子がRを知ること知らねばならず、弟子も師がRを知ること知らねばならず、さらに、師は、弟子が師のRを知ることを知っているということ、このことをも知らねばならず、こ

うして二枚の鏡を向い合せたように、知識の反射性は無限に至るのではなくてはならない¹⁹⁾。

ところで、行為や信念の合理性を規定するのはこのような伝統ではありえない。伝統化する規則は成員によって相互に知られていなくてはならないが、非伝統的な、ありきたりの行為なり信念なりにかかわる規則は、成員によってたんに共有されていれば十分である。言い換えれば、各人が規則を事実上知っていればよい。伝統というと、いつとは知れぬ昔から途切れることなくつねにあったものと思いがちだが、実は伝統とは所産であって決して本源ではない。むしろ共有された規則が相互的規則に転化するのである。非合理的な信念がそのように映るのは、相対論者の言うように伝統を異にする規則によってそれを律しようとするからなのではない。そして、その信念の属する伝統に参入すれば非合理性がこの伝統固有の合理性にただちに転化するわけでもない。ポロロ族が「われわれは金剛インコだ」と言うとするれば、われわれも「人間は狼だ」などと言う。だから問題は隠喩であり、半命題表象を伴う表象的信念なのだ。ここには参入すべき伝統など存在しない。ポロロ族のことに有意性を付与するのはありきたりの文脈であって伝統ではないのである²⁰⁾。この事情は一見して非合理的な信念の各類型を通じて変わりないだろう²¹⁾。たとえば憑きもの信仰の合理性は、それがどのように奉じられているかについて知ることによって回復されうるものである。もとよりこの知識は相互的なものではありえない。

相対論に伴う倫理的範疇はニヒリズムにはかならない。それは相手の文化をこの上なく尊重している。その文化内部で生起するあらゆる信念は文句のつけようもなく合理的だと言う。しかしその実、この価値の無原則的容認は合理性など信じないという密かな眩きを伴っていないだろうか。その証拠は、こうした見解によっては、社会的な弱者に多かった「妖術師」を数知れず火刑台に送った魔女裁判を決して非合理だと断罪しえない点に歴然とあらわれている。歴史の皮肉は、しかし、これまでこうした断罪にくみしてきた同じ人間が時と場合によっては、断罪された人間のしたこととそっくりなおこないを合理性の名の下に、あえてすることがあるということだ。相対論者はなんらかの根拠から（たとえばそれが美的でないという理由で）魔女裁判を批判しうるかもしれない。しかし彼には相互性に基づいて伝統的に整然となされる愚行や野蛮（たとえばナチスによるユダヤ人虐殺）を批判する権利はないと言わなくてはならない。

6 課題

これまで「なぜ」の問に端を発した信念の合理性という問題をスペルベルの理論に助けられつつ追ってきた。その理論の概要を明らかにすると同時に、なによりも、それがわれわれのまわりに跋扈するあらゆる紛糾と逸脱（その最たるものが相対論である）の根を截ちうる

能力をそなえる点をおおよそ裏づけることができたように思う。今しもわれわれの目前に据えられようとする新たな問題がある。スペルベルの信念の合理性にかんする理論をいっそう広い平面にときはなつて、理論がそなえる概念自体を今一度点検し、人類学的理論から合理性の哲学への掘下げをはかること、これである²²⁾。まっさきに手をつけねばならないのは、この理論で中枢の場所を占めている「表象」の解明であろう。命題と半命題とを包括する概念表象の理論への採用は、上に見たように、たしかに目覚ましい結果をもたらす。ところが、命題の同一指定という難問とそっくりな事態が、実は概念表象へ持ち越されたのである。たとえ最終的な解決をみるのが難しいとしても、この間を幾分なりとも明らかにすることを通じて、表象にまつわる事項の整理をおこなうべきだろう。また、信念についても残された問題は多い。たとえば、信念と知識の関係、信念と行為の関係、信念の多義性などの問題がある。これらに対して、スペルベル理論はどのような含意をもたらすだろうか。この点には先学の考案や現在果されつつある探究からも学びつつ、あらためて取組みがなされねばならない。

〔註〕

- 1) 菅野盾樹「信じることと知ること」、『哲学雑誌』94巻766号, 1979, p. 122 参照。
- 2) 志賀義雄『もちはなぜまるいか』, 1949, 三一書房, p. 6 seq.
- 3) リーンハート『社会人類学』(増田義郎・長島信弘訳), 1967, 岩波書店, p. 172.
- 4) セリグマン『魔法』(平田寛訳), 1961, 平凡社, pp. 276-279.
- 5) フレイザー『金枝篇(一)』(永橋卓介訳), 1951, 岩波文庫, 第三章。
- 6) スペルベル『象徴表現とはなにか』(菅野盾樹訳), 1979, 紀伊國屋書店, p. 15.
- 7), 8) 同書, p. 16.
- 9) ノストラダムス, 出口王仁三郎など古今東西の予言者の信仰, UFO, アポテーション・空中浮揚(レヴィテーション)・サイコメトリー等々の超常現象, 心霊現象, ネッシー・ツチノコ等々の未確認動物, 永久機関・オルゴンエネルギー等の擬似科学的発明発見, いわゆるオカルトブームにみられた神秘的なものへの関心, またシュタイナー等の神秘主義的文献の翻訳紹介, 「密教ブーム」, 星占術, 四柱推命等あらゆる「術」を基礎にした占いのメディアにおける氾濫, 超古代文明の信仰, 最近では若い娘たちに流行している血液型性格相性学等, とても枚挙しうるものではない。
- 10) Black, M., "Why Should I Be Rational?" (*The Prevalence of Humbug and Other Essays*, 1983, Cornell Univ. Pr. 所収) 参照。
- 11) Jarvie と Agassi はフレイザーをそのように解釈している。cf. Jarvie, I. C. and J. Agassi, 'The Problem of the Rationality of Magic' in Wilson, B. R. (ed.), *Rationality*, 1970, Harper & Row, p. 179.
- 12) *Ibid.*
- 13) スペルベル「一見して非合理的な信念」, 『人類学とはなにか』(菅野盾樹訳), 1984, 紀伊國屋書店, 所収。
- 14) 小塩力・山谷省吾監修『旧新約聖書神学辞典』, 1961, 新教出版社, p. 43. なお同辞典の「復活」の項目も参照。
- 15) 命題にかんしては次を参照。菅野盾樹「真理」, 神川正彦編『哲学』, 1984, 勁草書房, 所収。
- 16) ただし隠喩をはじめとする比喩の諸形態は半命題内容を伴う事象の信念を言いあらわす場合があるように見える。たとえば私の記憶に「愛は二人で作る芸術作品だ」という表象が直接貯えられることがあるかもしれない。愛は物質からできているわけではなく、画廊に展示されるきづかいもないから、こうした表象は文字通りには偽である。にもかかわらず、隠喩としては何か真なることをそ

れはあらわしている、と見なすことができる。この例には、われわれが半命題表象を突き抜けて命題表象へ至る可能性が暗示されているのではないだろうか。隠喩における真理の問題にかんしては、菅野盾樹『メタファーの記号論』、近刊、勁草書房、を参照。

- 17) Gellner の主知主義の場合。cf. Gellner, E., 'Concepts and Society' in Wilson, B. R. (ed.), *Rationality*, 1970, Harper & Row.
- 18) 相対論の批判的検討は別に取組まれるべきである。
- 19) 詳しくは Smith, N. V. (ed.), *Mutual Knowledge*, 1982, Academic Pr. 参照。特に隠喩とのかかわりでは、菅野盾樹『メタファーの記号論』、近刊、勁草書房、第8章参照。
- 20) スベルベル『人類学とはなにか』、1984、紀伊國屋書店、pp. 83-84.
- 21) 一見して非合理的信念をあらわす文には ① ポリフォニーの形態（ボロロ族のことばはこの一例）、② 字義的形態の二別がある。これとは別に「一見して合理的な信念」をあらわす非合理的な文という部類が存在するように思われる。例として前出の科学雑誌の記事を受売りする私のことばをあげることができる。これにはポリフォニーの形態が伴わないのではなからうか。いずれにせよ、以上は全て半命題内容を持つ信念文にほかならない。
- 22) その初歩的な考察は別稿にゆだねられる。「信念について」、『年報人間科学』第6号、1985、大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室、所収。

REMARKS ON SPERBER'S *APPARENTLY IRRATIONAL BELIEFS*

Tateki SUGENO

Problem

Apparently irrational beliefs prevail all over the world. For instance, according to anthropological reports the Bororo of Central Brazil believe that they are macaws. To give another example, it is well known that people living in African societies believe witchcraft.

Our direct reaction to beliefs of this kind is negative. We don't hesitate to criticize those beliefs as irrational and absurd. There remains, however, an unsolved problem. Why do those who have the same intellectual faculties as ours believe such irrational things?

Intellectualistic Solution

Trying to answer this question, intellectualists such as Frazer and Lévy-Bruhl impose a handicap on the mind so that it allows of irrational beliefs. According to Frazer "primitive" people frame magical beliefs in accordance with wrong associations of ideas. Lévy-Bruhl argues that they construct irrational beliefs because they have pre-logic mentality negating the law of contradiction.

From the intellectualistic point of view, the irrational appearance of beliefs results from the fact that the "western" standards of rationality are applied to them.

Sperber's Theory

Sperber shows that intellectualistic way of doing commits the fault of making beliefs in question be factual. He divides beliefs in general into two groups: factual beliefs and representational ones. A subject's factual beliefs are all the independently stored conceptual representations that the subject is capable of retrieving from his memory and all the representations that he is capable of deriving from his stored factual beliefs. A subject's representational beliefs are defined as all the dependently stored conceptual representations in his memory. He makes another distinction between all stored conceptual representations. A conceptual representation that succeeds in identifying one and only one proposition is called *propositional representation*. A conceptual representation that fails to identify one and only one proposition is called *semi-propositional representation*.

Now we are ready to answer the previous question. The apparently irrational beliefs belong to the representational beliefs with the semi-propositional content. It is prohibited that we use the western standards of rationality to beliefs of this kind because these standards can be applied to nothing but factual beliefs with the propositional content. If the appropriate standard i. e. the standard of authority of the representational origin is applied to them, their appearance of irrationality will instantly go out.

Its Merits

One of this theory's merits is, needless to say, that the initial problem can be solved in a definite manner by this theory.

Another merit may want some explanation. Intellectualists try to reduce the irrationality of beliefs either by mending people's intellectual faculties or by setting the "social context" which is necessary for the application of rationality criteria. Relativists argue that there is no cross-cultural standards of rationality. By this they mean that each culture has its own standards and there is no "irrational" beliefs in its absolute sense.

Neither intellectualists nor relativists can accuse, for instance, the massacre of the Jews which was done by the Nazis because of their tolerance to irrationality or their nihilism. Sperber's framework, however, enables us to say that apparently irrational beliefs are really irrational because of their semi-representational content.

Further Problems

Sperber's theory itself involves not a few problems. First of all, we should improve the epistemology of conceptual representations. How can we identify a conceptual representation? Does non-verbal representations i. e. so-called mental images exist? Can beliefs be identified with knowledge? In what manner are beliefs related with human actions? How can the intentionality of mental phenomena be evaluated in Sperber's framework? These are among further problems.